巻頭言

# コロナ禍の都市創造学部

亜細亜大学都市創造学部　学部長
松　岡　拓公雄

今年度、中国武漢から発生した新型コロナウイルスのパンデミックによって世界は一変し、感染対策のために人々は仕事や生活のスタイルの見直しを余儀なくされた。予測もしていなかった事態に人々は戦々恐々とし、都市の人々の姿は疎らになっていった。大都市圏では非常事態宣言が発令され、コロナ禍に飜弄された都市生活は今現在も続いている。一年が経過しワクチンが救世主となるのか不安な日々が続く。

亜細亜大学も卒業式、入学式、出会いの広場など軒並み重要なイベントが全て中止となる。昨年度は都市創造学部においては初めての卒業生を式典無しで社会に送り出すことになった。集まることもできず、不可抗力とは言え彼らに申し訳ないという気持ちが教員には今も残っている。そのまま過酷な状況の中で、遅れての新学期を迎えたが新入生も教員も手探りの中でスタートした。人類がIT化で進めてきた技術で一気にオンライン授業へと移行し救われた。新カリキュラムでしかも105分受業のオンライン授業や対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド授業への切り替えは試行錯誤しながら軌道に乗るまで時間を要した。しかしそれよりも学部の心臓部への直撃は痛かった。学部の一番の売りの「アジア各国とアメリカへの全員留学」が受け入れ先はもとより、国同士の交流も遮断され、国外へ出ることも叶わない最悪の事態となり、オリンピックは延期され、学部にとっては手痛い深刻な事態となった。この一年はこの対応に心血が注がれたといっても良いだろう。

二年次での留学は当然中止となり、彼らの単位不足が生じないように授業の前倒しなどで対策を打った。全学年オンライン授業は主に「授業支援システム manaba」でのやりとり、あるいはZoomでの授業となり、出席率は上がるが課題や宿題の多さに学生の負担が大きくなるといいう弊害もあり、加えて特に留学生をはじめ地方出身の一人暮らしの学生は、友達もできず、外出もアルバイトもままならぬ生活に耐えきれず、結局は本国や地方に戻りオンライン授業を受けた。学生も教員も疲労したのは間違いない。特に一年生は最初からキャンパス生活を送る事もできず可哀想で心が痛む。少人数の基礎ゼミナールのZoomなどによる担任との画面対面が唯一の救いだったかもしれない。

恒例の秋の学部のシンポジウムも「コロナの先にあるもの」がテーマとなり、コロナ一色の中Zoom形式で開催し、学生と学部教員、発表者、コメンテーターが一体となって盛り上がった。学外の参加者からも好評で、やはり、何かしらこういったイベントは続けなくてはならないことを確信する。

しかし次年度もコロナ禍が続くことも想定し、そのための留学運営委員会を立ち上げ、オンライン留学プログラムが検討された。２月にその企画が学園側にタイミングがぎりぎりの時点で承認された。それを実践すべく各国の留学担当教員はじめ総動員で国際連携部と組んで計画中である。

次年度から開設当初から続いてきた学部運営体制も変わる。また退任される先生が５年間連続する。立ち上げ時のメンバーが大きく入れ替わっていくことは避けられない。都市創造学部の創設の理念は変わらずとも、さらなるグローバル化やICT化など急速な時代の変化を予知して、それに応じた体制と教育、研究内容を追求して行かねばならない。それはこのコロナ禍の中での生き残り戦略になり得る。

コロナ禍と言えども、各教員は個々に工夫を凝らし、教育と研究、さらに社会貢献などの活動も着実に続けている。対外的な評価も悪くない。その報告の場のひとつがこの紀要である。苦難の中、逆にオンライン授業の良さ、オンライン留学の良さなども指摘されている。むしろ、そうやって前進している事を他者にも理解していただけるように、幅広く学部活動を発信していきたい。